

51Cの地方都市における展開 —福岡県住宅協会が建設した51C型住宅—

主査 菊地 成朋^{*1}

委員 山口 謙太郎^{*2}, 柴田 建^{*3}, 田島 喜美恵^{*4}

公営住宅標準設計51Cは、日本の住宅計画史上におけるダイニングキッチン成立の契機として位置づけられ、さらに昨今ではnLDK蔓延の起源であるかのように語られることもある。ただし、51Cが実際にどう建設され、どのような住まいを実現させたのかについてはあまり知られていない。この研究は、福岡県内に現存する51Cを発掘し、実測調査によってそれらの記録を作成し、これに資料分析を加えて地方都市圏における51Cの展開を明らかにすることによって、51Cの実像への接近を試みたものである。

キーワード: 1) 51C, 2) ハウジング, 3) 標準設計, 4) 公営住宅, 5) 住宅協会, 6) ダイニングキッチン, 7) 食寝分離, 8) 生活史, 9) 団地, 10) 地方都市

THE DIFFUSION OF 51C BUILDING TYPES IN LOCAL CITIES

— 51C Flats of the Fukuoka Prefecture Housing Association —

Ch. Shigetomo Kikuchi

Mem. Kentaro Yamaguchi, Ken Shibata, Kimie Tajima

The standard planning type called 51C for public housing has long been regarded as the turning point of the prevailing style of dining-kitchen in Japanese housing, whereas in fact it is recently criticized for being the cause of enduring the nLDK type. Little has been known about how the 51C buildings were constructed and what they achieved in terms of residential style. Focusing on the existing 51Cs in Fukuoka prefecture, the paper addresses the real image of 51C based on building surveys for keeping its record and the analysis of extant materials, and reveals its evolution in local cities.

1. はじめに

1.1 研究に至った経緯

公営住宅標準設計51Cをめぐることは、これまでも多くの議論がなされてきた。ダイニングキッチン成立の契機として戦後住居史上のメルクマールに位置づけられ、現代の日本の住宅を方向づけたもののようになされている。最近になって、51Cは再び議論の俎上にあげられるようになった。それは、現在の日本に蔓延するnLDK型住宅への批判として繰り広げられ、51Cがその元祖であるかのように語られたりしている。^{注1)}ただし、それらの議論では51Cの計画理念のみが話題となり、実態についてはあまり認識されていない。

一方で、51Cは建設後50年以上が経過し、そのほとんどがすでに取り壊されたと見なされている。そんな中、福岡市では、2007年時点で51Cの実例が1棟、残っていることが確認され、新聞でも報道された(朝日新聞

2007.5.22)。しかし、この福岡市最後の51C「今川橋団地」も2007年に取り壊され、現在では福岡市に残存事例は確認されていない。

われわれは、今川橋団地の取り壊し直前に緊急実測調査を実施したが、その調査では、本来の51Cに独自の変更が加えられていること、施工段階での試行錯誤の跡が認められること等さまざまな発見があった。また、併せて行なった取材および収集資料の分析によって、北九州市を中心に51C型住宅が相当数まだ残っていることがわかってきた。旧八幡市など現北九州市域では、工業化のもと1950年代に多くの公共住宅が供給されたが、工業化の終息とともに住宅需要が停滞した。そのような条件下で、初期の公共住宅が今日まで残存したものと考えられる。

また、福岡県に建設された51Cには、各自治体によって供給された公営住宅のほか、「福岡県住宅協会」(現

^{*1} 九州大学大学院人間環境学研究院 教授
^{*1} 大阪大学大学院工学研究科 博士後期課程

^{*2} 九州大学大学院人間環境学研究院 准教授

^{*3} 九州大学大学院人間環境学研究院 助教

福岡県住宅供給公社）によって供給されたものも相当数あったことがわかっている。福岡県住宅協会は、戦後制定された住宅金融公庫法に対応して1950年に設立された組織で、実際の設計や管理は県の建築部住宅課の技術者によって行われていた。今川橋団地は、福岡県住宅協会が建てた51Cの1つである。

北九州市内には、自治体による公営住宅51C（以下「公営51C」）と福岡県住宅協会による51C（以下「協会51C」）のどちらも数棟残っていることが確認された。さらに、両者は外観にも明らかな違いが見られた。ただ、それらの多くは、建て替えが決まっていたり、近い将来に取り壊しが予定されていたりしている。すなわち、これらの51Cは、まもなく姿を消す可能性が高い。

1.2 研究の目的と方法

本研究は、福岡県内に残る51C型住宅の発掘と記録を第一の目的としている。資料収集、現存事例の実測等を通じ、その建築的特徴を明らかにするとともに、現地での情報収集や居住者への取材によって、住まわれた空間としての51Cの履歴を記録する。この報告では、特に福岡県住宅協会がつくった51Cに焦点をあてる。

ここでの目的は、概念的な計画論へとつなげるのではなく、実像を捉えることにある。実際の計画・設計・建設に際して何が意図され、何が実現されたのか、それを具体的に明らかにしたい。また、半世紀以上にわたってこれらの51Cは住み続けられてきた。その生活履歴を記録し、居住者の営みのなかで51Cがどのような意味づけがなされてきたのかを示したいと考える。

1) 協会51Cの供給実態に関する資料調査

当時の福岡県住宅協会の供給実態とその中での51Cの位置づけを検討するために、福岡県住宅供給公社が所管する管理リスト等をもとに、福岡県住宅協会による1951年前後の住宅供給を分析することにした。福岡県

住宅協会が行なった事業の概況については『福岡県住宅復興誌Ⅰ』^{※15)}に年度ごとの供給量が型別に掲載されており、51Cの建設数についても把握が可能である。また、公社が保存する旧管理リストから51C住棟の具体的データを得る事ができたが、これは管理を目的としたストックベースの資料であるため、協会が建てた51C住棟すべてのデータが得られたわけではない。そこで、これらの資料を総合的に検討し、協会が51Cをいつ、どこに供給したのかについて推定を行なった。

2) 51C型住宅の存続状況の調査

上記の資料調査で抽出された51Cを採用している住宅団地を現地視察し、その存続状況を確認した。その結果、協会51Cが9団地に15棟、公営51Cが3団地に7棟、現存していることが判明した（2008年時点）。それらのリストを表1-1に示す。協会については、これが県内に現存する全事例であると考えられる。公営住宅については、北九州（旧・門司、小倉、戸畑、八幡、若松）市営として現存するものはこの7棟のみである。

3) 現存事例の実測調査および居住実態調査

事例検討の対象として、福岡市の今川橋団地、大牟田市の白金町団地、旧門司市の大杉町団地^{※2)}を選定した。

表1-1 福岡県内に現存が確認された51C

供給主体	所在地	団地名	棟数
福岡県住宅協会	北九州市	大杉町団地	4
		馬寄団地	1
		新町団地	2
		三萩野団地	1
		中原団地	1
		小芝団地	2
		泉町団地	1
	久留米市	両替団地	1
	大牟田市	白金町団地	2
門司市	北九州市	鳴竹団地	3
		北川団地	2
		馬寄団地	2
計			22

表1-2 調査対象とした51C住棟

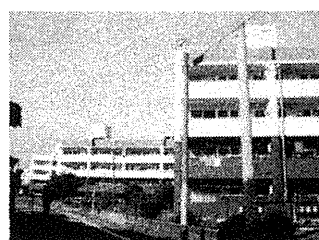
団地名・棟名	供給主体	所在地	建設事業年度	階数・住戸数	備考
今川橋団地1棟	福岡県住宅協会	福岡市中央区地行	1951	4階建40戸	2007年に解体
白金町団地1・2棟		大牟田市白金町	1951・52	4階建24戸・16戸	三井鉱山職員社宅と隣接
大杉町団地3~6棟		北九州市門司区大里戸ノ上	1952	4階建16戸×4	改装による間取り変更
北九州市営馬寄団地9・13棟	旧門司市	北九州市門司区社ノ木	1952	4階建24戸×2	協会住宅などの複合開発



今川橋団地



白金町団地



大杉町団地



馬寄団地

写真1-1 対象団地外観

さらに、比較のために門司市営馬寄（まいそ）団地についても調査を行なった。これらの団地の基礎データを表1-2に示す。

調査では、実測により、配置図、住棟立面図、断面図、住戸平面図、展開図等を採用した。また、現在も居住されている住戸を訪問し、家具配置等の生活図面を作成するとともに、住宅の使い方を中心とした生活履歴についてヒアリングを行なった。

4) 施工・構法に関する実地調査

調査対象の51C住棟は、鉄筋コンクリート造集合住宅の九州における最初期の事例であり、施工・構法の視点からも注目される。今川橋団地については住棟解体時に施工・構法に関する調査を実施しており、これをもとに他の事例についても現地での確認を行なった。

2. 福岡県住宅協会による51C型住戸の供給

2.1 福岡県住宅協会の供給した住戸型系列

まず、福岡県住宅協会の住宅供給をマクロに見てみることにする。表2-1は、1950年の設立から1954年までの5年間の供給実績を住戸型別に示したものである。この5年間は「福岡県住宅復興緊急5ヶ年計画」実施期間にあたる。住戸タイプ表記の数値は年度を表し、アルファベットは住戸規模の序列を表している。この表記法は公営住宅標準設計と同じである。つまり、福岡県住宅協会は、国の公営住宅政策に準じた型系列による住宅供給を行っていたということになる。なお、このような供給形態は、同時期の他の住宅協会に共通するわけではない。例えば、同じ1950年に設立された八幡市住宅協会は、八幡の戦災復興都市計画と連動して、個別設計による都市型集合住宅を建設している。^{注3)} 同じ住宅協会でも、県と市とでは方針が全く違っていたのである。

表2-1をみると、福岡県住宅協会は当初の5年間に20以上の住戸タイプを採用している。しかも、採用されるタイプが毎年のように移り変わっている。これは、当時のハウジングが革新の時代にあったことを示すものであろう。その中で、51Cは1951年から1953年の3年にわたって採用されている。そして、いずれの年度でも51Cの供給数が最も多い。その総数は932戸で、3年間の総数の3割以上を占める。すなわち、51Cは福岡県住宅協会の主流に位置づく住戸タイプだったといえる。^{注4)}

2.2 協会51Cの立地

つぎに、これらの51Cがどこに建設されたのかをしてみる。

図2-1は、51Cの立地を市町村別に示したものである。これをみると、福岡市、現北九州市の5市、久留米市、大牟田市といずれも福岡県内の主要都市圏である。福岡市が最も多いが、北九州の5市を合計すれば福岡市を上まわる。これは、工業都市として発展しつつあった、当時の北九州の住宅需要を反映したものであろう。

図2-2は、福岡市における協会51Cの立地を示したものである。都市インナーでもなく郊外でもなく、当時の都市のフリンジに位置している。4年後に設立された日本住宅公団が郊外部に計画的住宅団地を建設していったのとはかなり異なる。

図2-3は、北九州における51Cの立地である。福岡市以上に51Cを有する団地が多かったことがわかる。その多くは都心からはずれた周縁部に位置している。

このように、福岡県住宅協会の住宅建設は、福岡市でも北九州でも都市フリンジで行われており、それらはいずれも規模の小さい団地である。おそらく、建設用地を個別に獲得し、そこに最新の鉄筋コンクリート造集合住

表2-1 福岡県住宅協会の型式別供給戸数

	1950	1951	1952	1953	1954	型合計
49A	80					80
50B	392					392
50D	148	144	148			440
50P		40				40
51A		104	96			200
51B		104				104
51C		392	224	316		932
51D					30	30
51S		216	192			408
52B			36	18		54
52C			102	12		114
52F			96	96		192
52T			42			42
53C				114		114
53D				54		54
53F				270	124	394
54B					160	160
54C					260	260
54D					60	60
54F					128	128
54T					26	26
その他	10	108	88	41	113	360
年度合計	630	1108	1024	921	901	4584

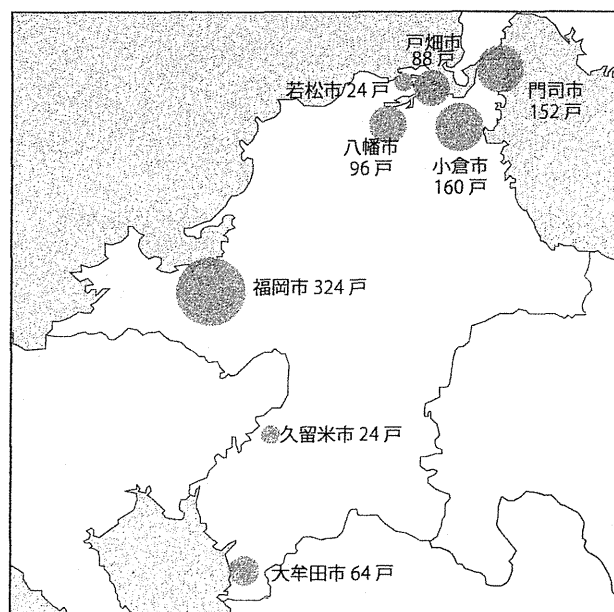


図2-1 福岡県住宅協会が福岡県内に供給した51C

宅を建設していったというのが実情ではないかと思われる。それは、低所得者への住宅供給を目的とした公営住宅とも、大都市郊外に計画住宅地を建設した日本住宅公団とも異なる性格の事業であった。

2.3 住棟の配置

実際に、51C がどのような場所にどのような形で建てられたのかを、実例で見えていく。

1) 今川橋団地（福岡市）

図 2-4 は、今川橋団地の配置図である。この敷地は、江戸時代には樋井川東岸の北端に位置する武家屋敷地だった。建設時点でも、既存住宅地のはずれに位置していた。

3 つの中層住棟からなり、住戸はそれぞれ 51C-N, 50D, 51C-S というタイプが使われていた。N（北入り）と S（南入り）をペアで用いる住棟の配置方法は、当時は全国的に取り入れられていた。また、それらに挟まれた 50D 型はバルコニーをもたない片廊下型で、極小タイプの住戸である。

さらに、敷地の南側にテラスハウス型の店舗併用住宅がある。これは福岡県住宅協会によって建設された建売住宅である。店舗併用住宅を団地内に設ける例は今川橋以外にも見られ、それらの店舗は団地の人々の日常的な買物店になっていた。今川橋では、魚屋や果物屋などが営まれていた。

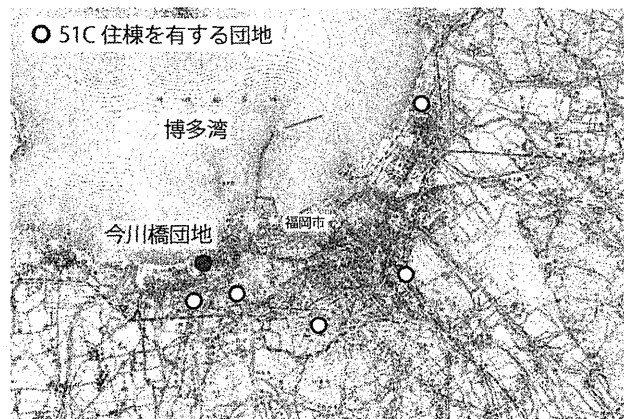


図 2-2 福岡市における協会 51C の立地

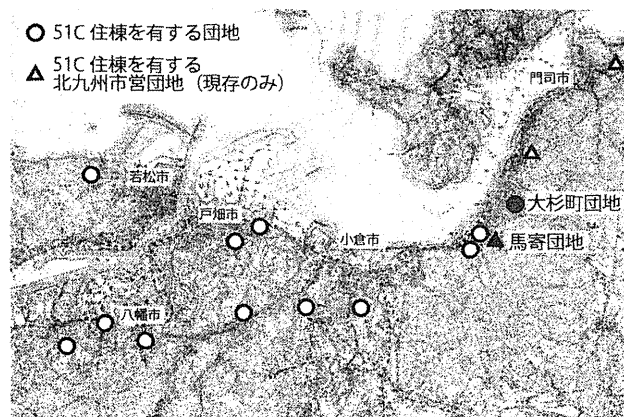


図 2-3 北九州市における協会 51C の立地（現存公営 51C を含む）

2) 白金町団地（大牟田市）

図 2-5 は、大牟田市の白金町団地である。大牟田は三井三池炭鉱を母体とする炭鉱都市であり、白金町はその中で高級住宅地として位置づいていた。そばには三井の職員社宅や倶楽部、炭鉱所属の病院などがあった。ちなみに、炭鉱における「職員社宅」は、いわゆる「炭鉱住宅」とは違って、社員が居住する中流住宅規模のもので、庭付きの一戸建てやセミデタッチド（2 戸 1）が採用されていた。^{文 21)} 図 2-5 中の職員社宅はセミデタッチド形式である。

そのような住宅地の中にあつて、協会の住宅は道路を挟んで 3 棟、建設されている。南側 2 棟が 51C で、道路を跨いだ北側の棟は 50D 型である。51C 型の 2 棟のうち、1951 年建設の第 1 棟は標準設計に準じた 1 フロア 6 戸の構成だが、1952 年建設の第 2 棟は 1 フロア 4 戸構成と変則的である。土地が個別に獲得された後に住棟配置が行われたことが推測される。

3) 馬寄団地（旧門司市）

旧門司市の馬寄団地（図 2-6）は、複数の主体による

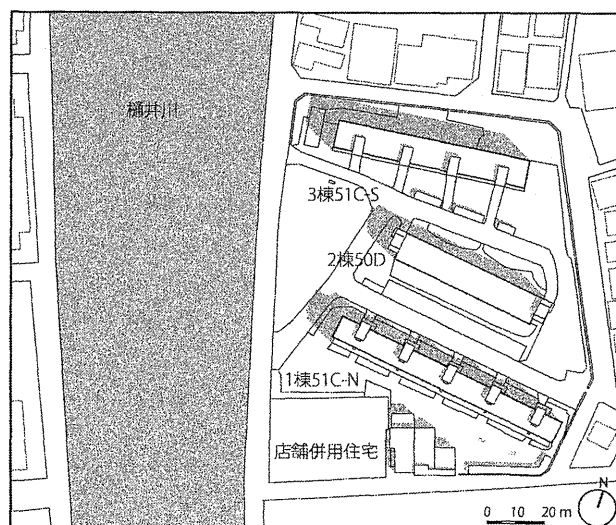


図 2-4 今川橋団地配置図（2005 年時点）

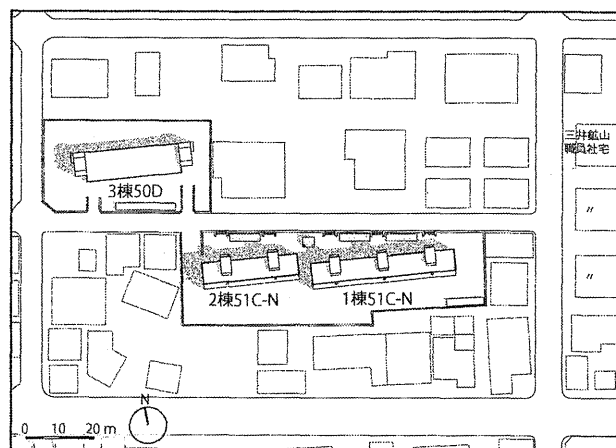


図 2-5 白金町団地配置図（1981 年時点）

れている。

馬寄団地は、中心市街地から少し離れた区画整理地区に位置する。海と山に挟まれており、湾岸には食品関係の工場が立地していた。この新興住宅地の中に一般住宅や商店などと組み合わせられるかたちで市営住宅が建設されており、団地として一定のまとまった敷地とはなっていない。また、当時の市営住宅の多くは木造やブロック造で、鉄筋コンクリート造の51Cはその中のごく一部に建てられたのみであり、それら異なる形式の住宅が混在して団地を形成していた。さらに、この地区には福岡県住宅協会の住宅、国鉄の官舎など、供給主体の異なる集合住宅もあった。協会の集合住宅3棟のうちの1棟は51C型である。このように、馬寄団地では公営51Cと協会51Cが近接して建っていた。居住者によれば、これら51C住棟はひときわ背の高い建物として目をひく存在だったという（写真2-1）。

これらを見てわかるように、51Cが建設された敷地は、小規模のまとまった土地、隣接する断片的土地、区画整理地区の一部など様々であった。また、木造やブロック造と混在して建っていたり、炭鉱の職員社宅と隣接して建てられたりして、周辺の計画と連動したものにはなっていない。配置には計画的意図があまり感じられず、これらの建設がもたらした住戸の供給を主眼としていたことがうかがえる。

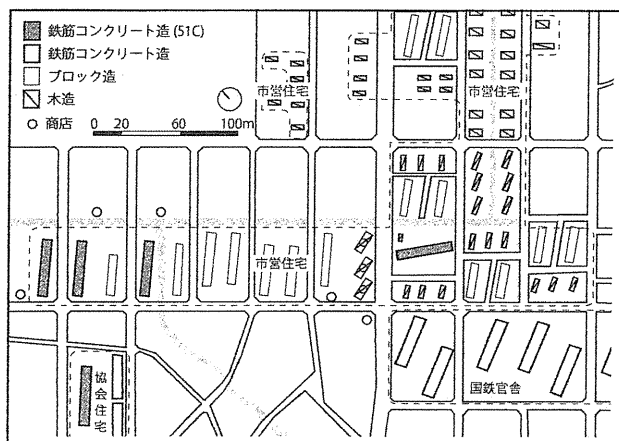


図2-6 馬寄団地配置図（建設当時）

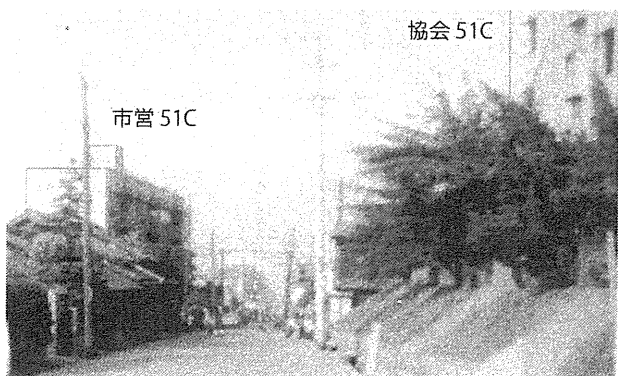


写真2-1 馬寄団地に建つ市営51Cと協会51C（長谷縫子氏提供）

3. 平面構成

3.1 標準設計51Cの計画意図

まず、標準設計51C（図3-1）の平面計画の意図を確認しておく。

51Cは、1951年の標準設計のうち、最も小規模なタイプである。東京大学吉武研究室によって提案されたが、^{注5)} その要点は「食事の場所と就寝の場所を分離すること」（西山卯三「食寝分離論」）と「寝室2室を別けて確保すること」（寝室分解）を40㎡足らずの面積の中で成り立たせることにあった。そのために取り入れられた空間が「台所兼食事室」である。この「食事もとれる広い台所」の提案が、のちのダイニングキッチン（DK）誕生へとつながったとされる。さらに、2つの寝室を壁で仕切ることによって独立性を高めた。一方で、南側寝室と台所兼食事室との間を全面開放できる間仕切りにして、この2室をフレキシブルに使えるようにしている。

ほかにも、壁で仕切った2室それぞれに押入れをつけ、それらを布団が納まるサイズにする、部屋の寸法を畳のモジュールではなくメートル単位とし、畳のサイズを変えてこれを床仕上げとして扱う、外側のバルコニーを洗面洗濯場と連続させ、サービスヤードとして使えるようにする、といった提案が込められている。

3.2 公営51C（馬寄団地）の平面構成

福岡で実際に建設された公営51Cがどのようなプランだったのかを、門司市営馬寄団地を例に検討する。

馬寄団地の平面構成（図3-2）を標準設計の平面構成（図3-1）と比較すると、一見まったく同じ間取りであるかのように見える。しかし、空間構成には明らかな違いがある。2つの寝室の仕切りが壁から襖に変更され、標準設計の独立した2寝室の構成が馬寄団地では続き間となっている。一方で、台所と南側寝室の間に、標準設計にはなかった壁が付けられている。51Cが公営住宅として実際に建設される際には、このような変更もあり得たのである。そしてそれが、結果的に当初の設計意図を変質させている。標準設計では、2つの寝室を分離し、台所と南側寝室を連続的にすることが狙いであった。それがこの実施案では消えてしまっている。

ほかにも、物置と便所の位置が入れ替えられ、それに伴い玄関のつくりも違っているなどの変更点が見られる。ただし、洗濯場への洗面台の設置やバルコニーの設け方などは標準設計に則っており、この部分については標準設計の提案が受け継がれている。

3.3 協会51Cの平面構成

では、協会51Cの場合はどうだったのか。その例として、図3-3に今川橋団地の実測図面、図3-4に白金町団地の実測図面を示した。

これらをみると、公営 51C より大きな変更が加えられている。まず、公営 51C と同様に、2つの寝室間の壁をなくし襖を付け、続き間としている。また、2つの寝室には、標準設計では異形だった畳が、いずれも正規の4畳半のかたちで敷かれ、襖やガラス戸も畳の敷き方と整合するように3尺モジュールで付けられている。2つの押入れの仕切りも3尺モジュールの位置にある。これらは、当時の一般住宅に即した変更と見ることができる。ただし、公営 51C で設けられていた台所と南側寝室の間の壁がこれらにはなく、この部分は標準設計の意図が踏襲されている。

最も大きな変更点は、バルコニーが住戸の幅いっぱいに設けられていることである。バルコニーの拡張に伴い、

そこへの出入り口も変更されている。標準設計と公営 51C では洗面洗濯場からの出入りだったが、協会 51C ではそれがなく、代わりに台所および南側寝室の2カ所に出入り口が設けられている。バルコニーへの出入り口がなくなった洗面洗濯場は、居住者が浴槽を設置して使う浴室空間となっている。なお、標準設計から便所と物置の位置が入れ替わっている点は、公営 51C と共通である。

3.4 公営と協会の違いの要因

間取りとしては、公営 51C は標準設計に忠実で、協会 51C は独自性が強いように見える。しかし、図面上では標準設計どおりに見える公営 51C も、実際の空間としては、とくに提案の要点であった部屋のつながり方が標準設計の意図とは違うものになっていた。順守したのは、図面上の同一性であったとみられる。

それに対し、協会 51C は図面を一目見ただけで違うものであることがわかる。これは、公営住宅では通常の業務として 51C が規準にもとづいて建設されたのに対し、協会の場合は数ある選択肢の中から 51C を採用し、設計案を作成して建設したことによると思われる。また、公営 51C は公営住宅法にもとづく賃貸住宅で、国庫から建設資金が支出されたのに対し、協会 51C は住宅金融公庫法にもとづいて公庫の資金によって建設された。そのような制度上の違いも要因となっていたと考えられる。

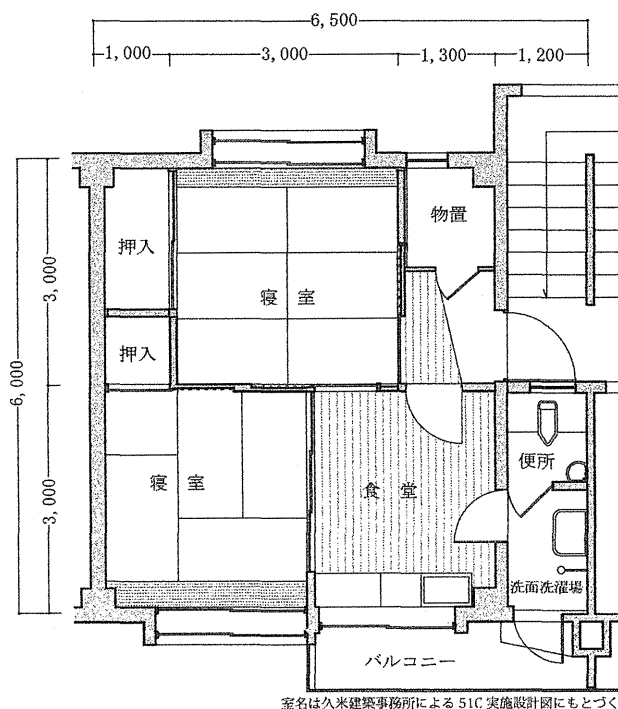


図 3-1 標準設計 51C-N 平面図

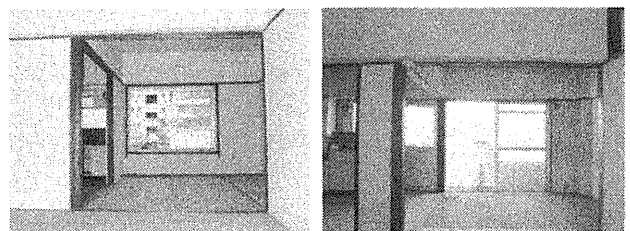


写真 3-1 連続する2つの居室
（馬寄団地）

写真 3-2 協会 51C のバルコニーへの
開口（今川橋団地）

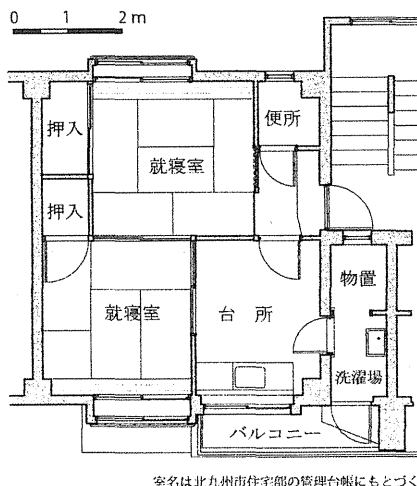


図 3-2 市営馬寄団地 9 棟平面図

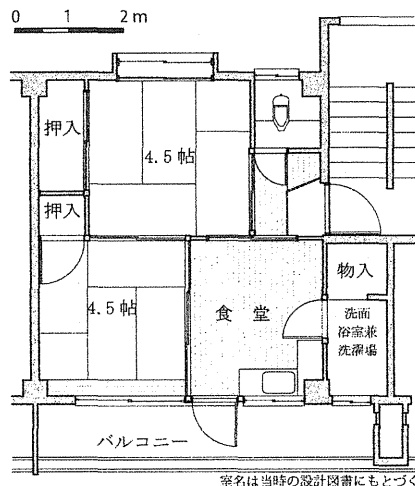


図 3-3 協会今川橋団地 1 棟平面図

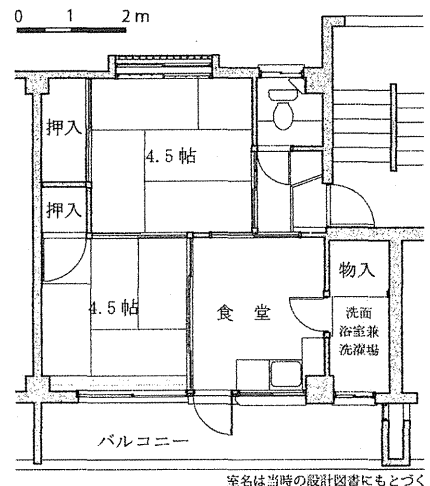


図 3-4 協会白金町団地 1 棟平面図

4. 外観

公営 51C と協会 51C の違いは、外観にも表れている。

図 4-2 に示した市営馬寄団地の南立面では、標準設計のものがほぼそのまま採用されている。唯一、底が階段室単位で 3 つに分節されている点異なるが、開口のとり方やバルコニーの設け方に大きな違いはない。なお、他の公営 51C も、ほぼ同様の外観となっている。

それに対し、協会 51C の外観は、標準設計とはかなり違ったものとなっている。図 4-3 は白金町団地の南立面だが、標準設計（図 4-1）ではバルコニーが 2 つの住戸ごとに分節されているのに対し、ここでは連続するバルコニーが住棟全体を覆っている。また、標準設計におけるバルコニーの手摺は鉄製だが、白金町ではコンクリートの腰壁となっている。図 4-4、4-5 は今川橋団地の立面図である。今川橋の 51C 住棟は 1 つの階が 10 戸で構成されていて、標準設計に比べると約 1.7 倍の長さになる。今川橋団地の住棟を眺めた時、その水平方向のスケールの大きさに目を惹かれるのはそのためである。手摺としてコンクリートの腰壁が連続的に全長を覆い、その頂部には造り付けのプランターが設けられている。

今川橋では、連続するバルコニーの腰壁が水平ラインを強調しており、ダストシュートによる垂直のラインとともにシャープな立面構成をつくりだしている。協会 51C では、他の事例においてもバルコニーが拡張されて住棟全長を覆うように設けられているが、手摺にはコンクリート製のほかに鉄製のものも見られる（写真 4-1）。

公営 51C と協会 51C の違いを断面で確認すると、市営

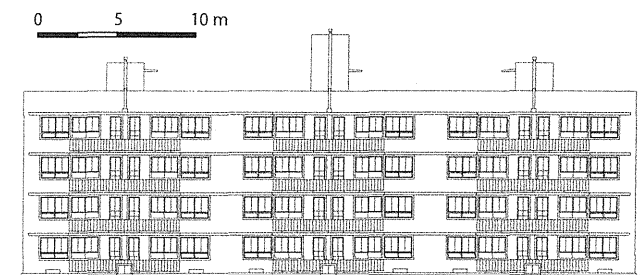


図 4-1 標準設計 51C-N 南立面図

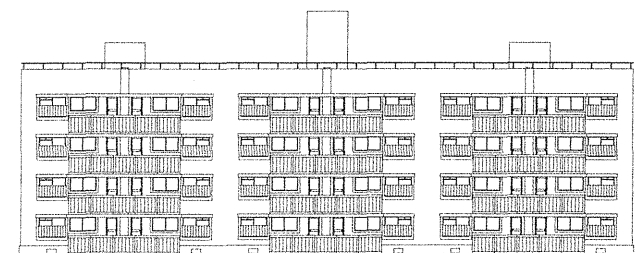


図 4-2 市営馬寄団地 9 棟南立面図

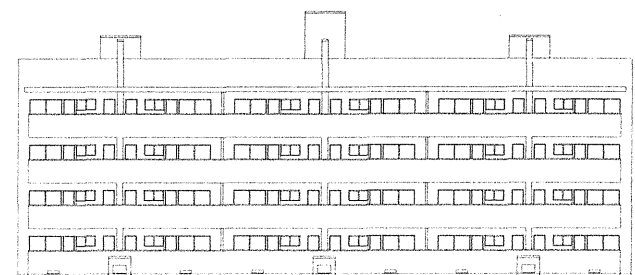


図 4-3 協会白金町団地 1 棟南立面図

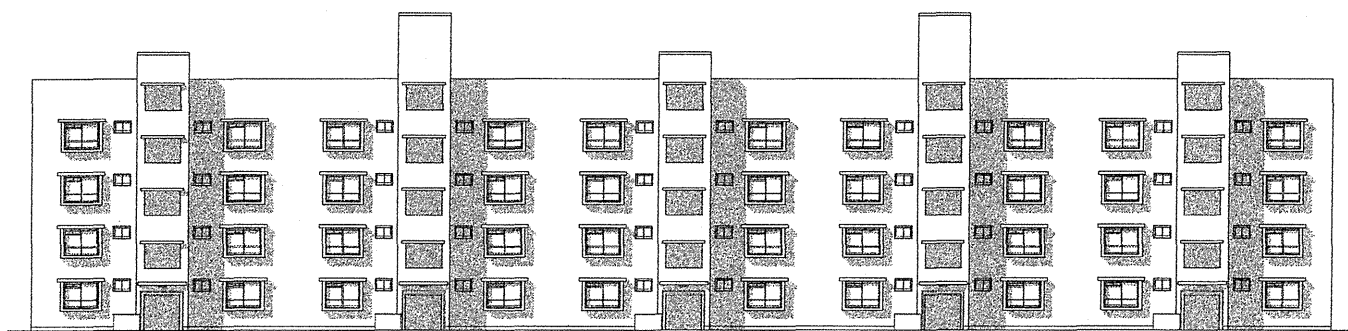


図 4-4 協会今川橋団地 1 棟北立面図 S=1:400

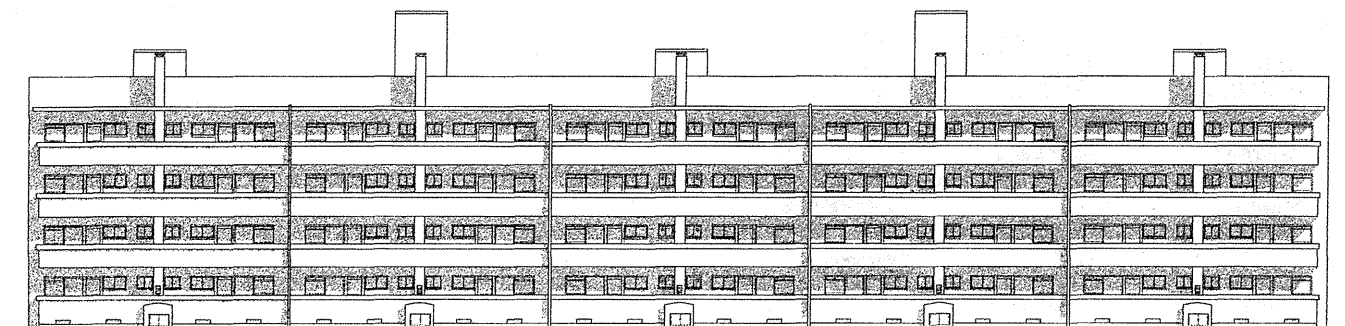


図 4-5 協会今川橋団地 1 棟南立面図 S=1:400

馬寄団地（図 4-6）では、バルコニーが室内から 60cm ほど下がったところに付けられている。これは、バルコニーのスラブを下階の庇としても使うためである。ちなみに、吉武研究室案ではこの段差は存在しなかったが、^{注6）}久米設計の最終案になってこのような形式が採用された。馬寄団地の段差はそれを踏襲したものである。

図 4-7 は白金町の断面図だが、これにはそのような段差がない。これは、バルコニーの付け方が変わり、室内とバルコニーの連続性が生まれたためにとられた処置であると考えられる。また、バルコニーの幅が標準設計より広がっており、利用価値の高い外部空間が作り出されている。さらに今川橋団地では、先述のようにバルコニーの頂部に造り付けのプランターが設けられている（図 4-8）。

5. 施工

今川橋団地の第 1 棟は、福岡県内の建設会社である岡部組によって施工が行われた。住棟が建設された 1951 年当時、鉄筋コンクリート造アパートの建設技術はまだ地方に浸透しておらず、今川橋団地の建設は標準設計にもとづきながらも、多分に試行錯誤的なものだったと思われる。そのようなプロセスの跡が各所に見てとれる。

今川橋団地では、最上階以外は天井が貼られておらず、躯体である鉄筋コンクリートに直接仕上げが施されている（図 5-1）。天井裏が存在しないので、電気配線などの設備は、躯体打設の際に埋め込まれた丸型鋼管の中に通されている。また、建具や造作材を打ち付けるための板も躯体内部にあらかじめ埋め込まれていた。躯体工事が、設備工事、仕上げ工事などと一体的に行われていたことがうかがえる。

解体時の調査の際、梁とスラブの接合部分において、45 度に隅切を施した型枠が組み、コンクリートの打設が行われたことがわかった。これは、構造的強度を高めるためのハンチにも見えるが、それほど大きくはなく、施工の際のコンクリートの充填をスムーズにするための処理とも考えられる。当時は鉄筋の曲げの技術がまだ進んでおらず、躯体内の曲げられた鉄筋に対して定着の為の十分なかぶり厚さを確保するために、このような処理

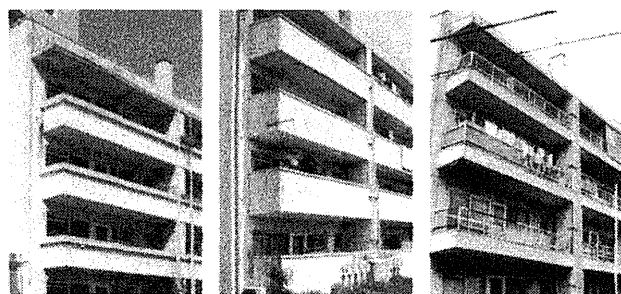


写真 4-1 協会 51C のバルコニーのバリエーション

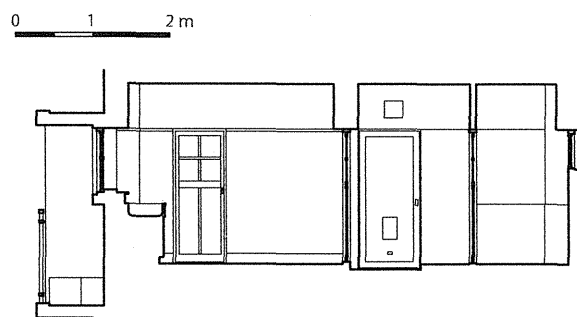


図 4-6 市営馬寄団地 9 棟住戸断面図

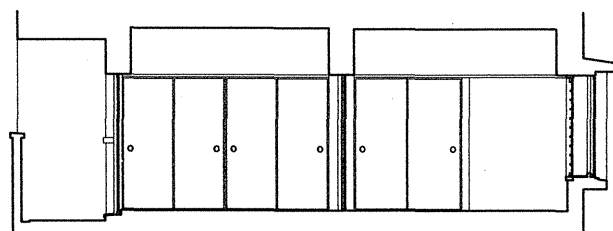


図 4-7 協会白金町団地 1 棟住戸断面図

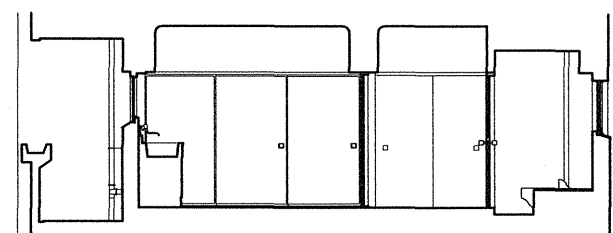


図 4-8 協会今川橋団地 1 棟住戸断面図

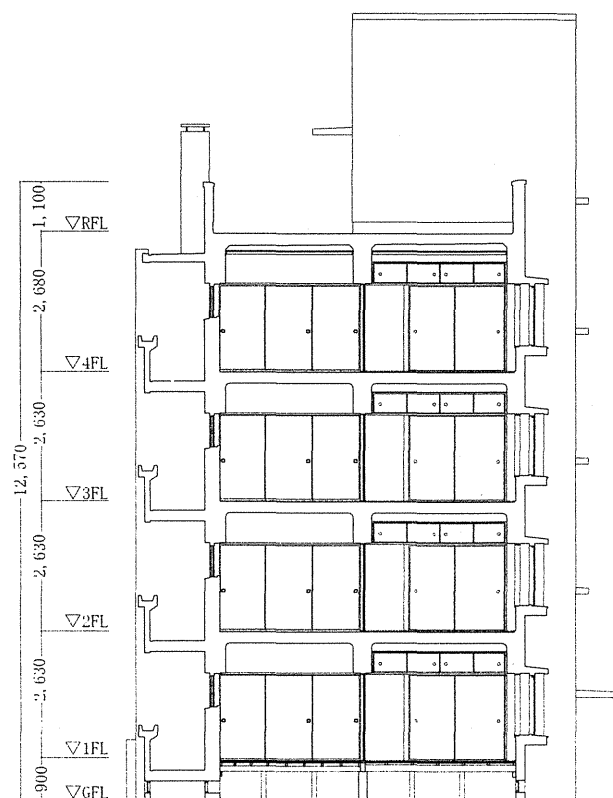


図 5-1 協会今川橋団地 1 棟断面図

が必要だった可能性がある。

さらに、この躯体のエッジに対して、その上からモルタル、荒壁、漆喰を重ね塗ることにより、円弧を描くようなアール処理が施されていることがわかった（図 5-2 上）。これは、45 度のエッジ処理に対応させるために考え出された仕上げ方法と見られる。

一方で、解体時の調査では、1 階角部屋である 110 号室の北面のみ、アール処理ではなく直角処理を行なっているのが見つかった（図 5-2 下）。位置的にもこの部屋で最初の仕上げ工事が行われたことが予想され、試しにこの方法をとってみたが、多量のモルタルを使って重ね塗りしなければならず、その手間から結局採用されず、その次の壁面からアール処理という新たな方法が試みられ、それが採用されたのではないだろうか。

ただし、このようなアール処理は協会 51C で一般的に採用されていたわけではない。門司の大杉町団地や大牟田の白金町団地では、通常の直角処理となっている。これらでは、躯体の 45 度の隅切処理が行われていないと考えられる。

6. 住まい方

51C に長期にわたって住んでいる居住者を対象に、生活履歴に関するヒアリングを行い、併せて家具配置等の生活図面を採取した。その中からいくつかを例示しながら、これらの 51C の中でどのような生活が営まれたのかを解説する。

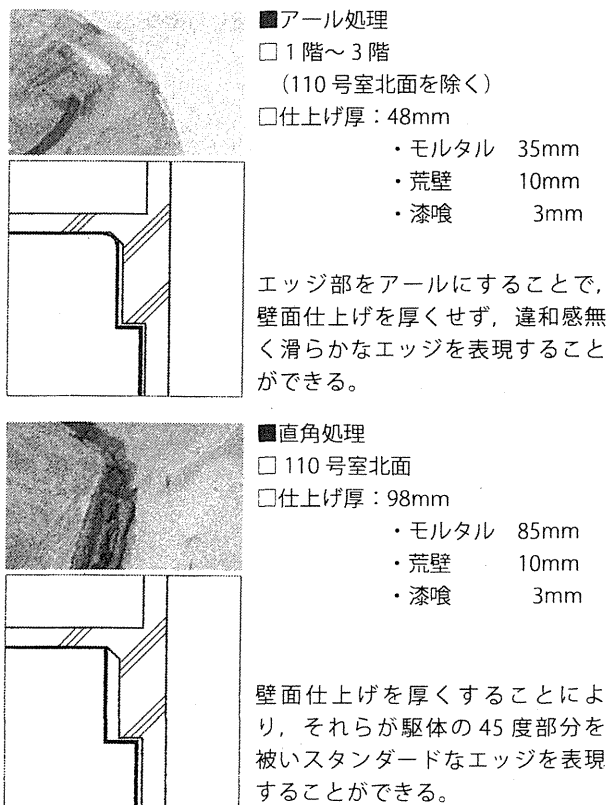


図 5-2 協会今川橋団地 1 棟躯体隅部仕上げ詳細

6.1 公営 51C（馬寄団地）での生活

建設当時は住宅不足の状況にあり、新しい鉄筋コンクリート造の 51C は希望が多く、入居の際に抽選が行われていた。家賃は当時としては高めで、入居者は安定した収入を持つ公務員や教師、国鉄職員などが多かったという。

図 6-1 の Y さんは、もともと門司市内の市営住宅に住んでいたが、1968 年に長男が生まれ、3 人家族となったのを機に住み替えることにした。この 13 棟は当時、憧れの住宅で、10 回目の抽選でようやく入居できた。

当初、夜遅く帰ってくる主人が子供を起こさないように子供は南側の居室①に寝かせ、夫婦が北側の居室②で寝ていた。食事は南側居室①でとっていたが、息子が成長してくるとそこは子供部屋専用となり、北側居室②で食事をするようになった。朝食は一番早く家を出る人に合わせるという家訓を作り、一家団欒の時間とした。台所③を食事に使ったことはない。棟内の他の家の使い方や収納の工夫を見て、自宅でも実践した。1970 年には、洗面所の物置を浴室化している。

Y 宅の室内を見ると、北側居室②は物がよく整頓され、居心地のよい空間を設えている。それに対し、南側居室①は物置となり、物干しにも使われている。台所はさらに家具や物で溢れている。

このような部屋の使い方の傾向は、おおむね他の家にも共通する。9 棟の H さんは 1959 年の入居で、当初は 4 歳の長男と生まれたばかりの次男の 4 人家族だった。現在は 2 人の子供が独立して夫婦 2 人暮らしである。4 人で暮らしていた時代は、南側の居室を子供部屋として使い、子供たちが勉強をする時にだけ襖を閉めていた。食事を台所でした記憶はなく、常に北側居室で食べ、就寝には息子たちが南側居室、夫婦が北側居室を使った。息子たちの机はなくなったものの、他の家具の配置は以前からほとんど変わっていないという。室内の様子を見ると、北側の居間には座卓が置かれ、回りにテレビやオーディオなどの家電製品、さらに日本人形や置物が並べられている。片や、南側居室は、不要になった家具の置き場となっている（写真 6-1）。

6.2 協会 51C での生活

1) 白金町団地

炭鉱都市大牟田の高級住宅地の一角に建つ協会白金町団地には、銀行員や教員、市役所職員といった階層が住んでいたという。

図 6-2 の M さんは、もともと大牟田市内に住んでおり、1970 年に白金町団地の抽選で当選したので引っ越してきた。入居時には夫婦と娘 1 人の 3 人家族だったが、2 年後に下の娘が生まれ、その後しばらくは 4 人で暮らした。

入居から子供が独立するまでは、南側居室①を居間として使い、就寝には夫婦が南側居室①、子供たちが北側居室②を使った。南側居室①の押入れには当初から仏壇が置かれており、布団類はすべて北側居室②の押入れに納めていた。また、台所③に大きなテーブルを置いて食事をしていた。このテーブルは入居してすぐ買った。テーブルで食事することに憧れがあったという。

子供が独立してからは、北側居室②を夫婦寝室とし、南側居室①は専用の居間として使っている。台所③に食器棚が増えて狭くなってきたので、テーブルを小さいものに替え、いまもここで食事をしている（写真6-2右）。

M宅では、住宅にさまざまな改装を施している。20年ほど前に、2つの居室の間仕切りを襖からガラス戸に替えた（写真6-2左）。これは、他の家からもらったガラスの建具を削って寸法を合わせ、取り付けたものである。これによって北側の居室が明るくなったという。ほかにも、北側居室②の天井を自分で塗り替え、台所③の玄関近くにあった造り付けの戸棚をはずしている。さらに、子供の学齢期には、バルコニーに勉強部屋を増設していたという。これらはM宅独特のもので、他の家でも

よく見られるというわけではないが、勉強部屋の増設は、協会51Cの幅の広いバルコニーがそれを可能にしている。

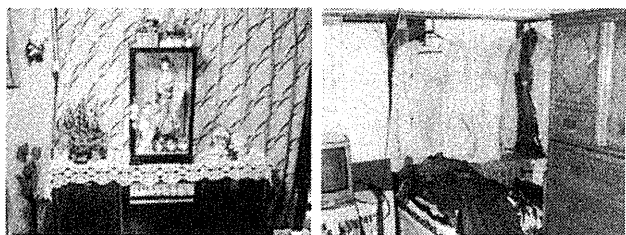
白金町団地では、台所にダイニング・テーブルを置いていた家が多い。また、ピアノやソファを持っている家も少なからずあったという。それらは主に南側の居室に置かれていた。

2) 今川橋団地

取り壊された今川橋団地についても、事前に住まい方に関する調査を行なっている。

図6-3のTさんは、1974年に入居した。当時は4人家族で、食事は北側居室②でしており、その部屋は夫婦の寝室にも使っていた。南側居室①は子供部屋となっていた。子供が独立してからは、南側居室①を居間とし、北側居室②を寝室としている。玄関と北側居室②との間の襖を板で固定し、そこに仏壇を置いている。同様に、北側居室②と台所③も行き来できない。部屋の使い分けは設計意図に概ね合っているが、部屋のつながりや動線は全く違っている。

今川橋団地は、バルコニーの手摺に付けられたブラン



H宅の北側居室

H宅の南側居室

写真6-1 市営馬寄団地の室内



M宅のガラス戸と仏壇

M宅の台所の食卓

写真6-2 協会白金町団地の室内

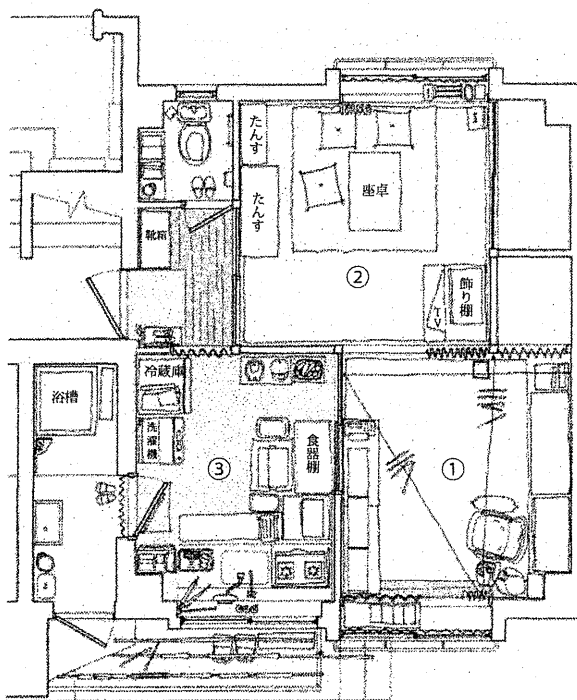


図6-1 市営馬寄団地Y宅

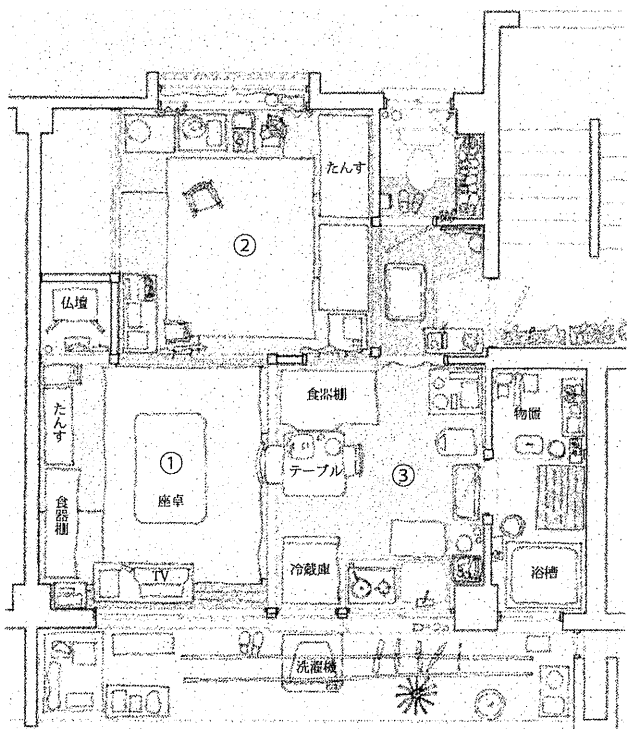


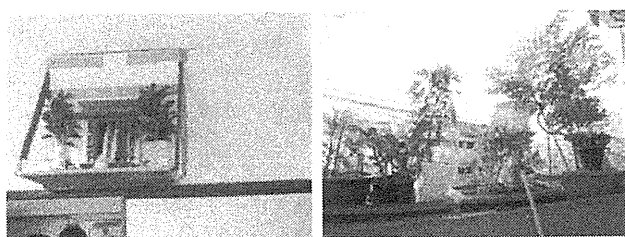
図6-2 協会白金町団地M宅

ターが独特である。このプランターは室内からの眺めにも効果的で、それを楽しむ生活が複数の事例で聞かれた。1人住まいのKさんは、食事や就寝のすべてを南側居室で行ない、ベッドもここに置いている。北側居室にはダンスや棚、その上に置物や人形などが置かれ、日常はあまり使わない空間となっている。日常の居場所をもっぱら南側居室にしているのは、バルコニーのプランターに植えた、たくさんの花や野菜を見て楽しむためという(写真6-3右)。

6.3 住まい方の規範

以上を比較すると、公営51Cと協会51Cとでは、住み方の傾向がかなり違うことがわかる。公営では、台所と南側居室は仕切られる傾向にある。生活の拠点は北側居室になり、台所では食事をしない。協会51Cでは、台所と南側居室が連続的で、この南側2室が生活拠点となり、台所で食事をするものもある。標準設計に忠実な公営51Cの方が、標準設計の想定からズレた住み方がされている。

このような違いを生む要因として、先述の設計変更が



T宅の居間に設けられた神棚

K宅のバルコニーの植物

写真6-3 協会今川橋団地の室内

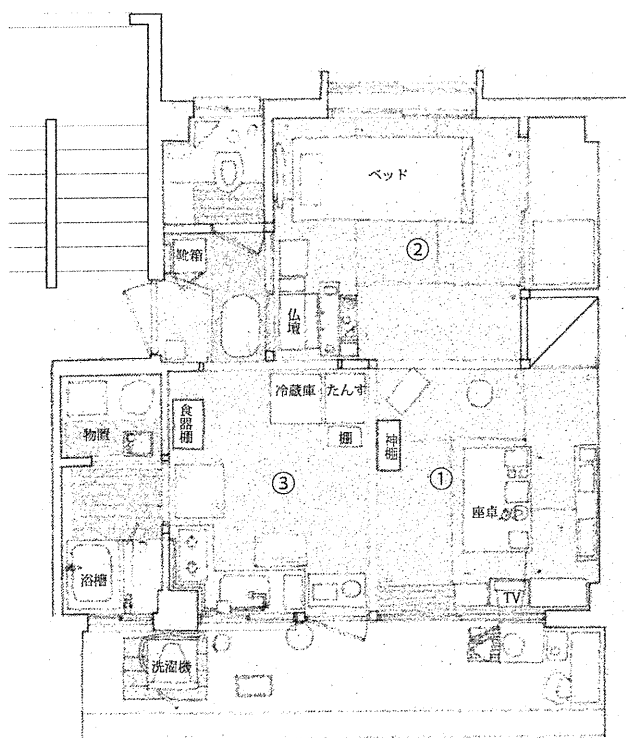


図6-3 協会今川橋団地T宅

あげられる。公営51Cでは、台所と南側居室の間の壁が延びたことで、2つの部屋は分節され、その間仕切りを背面として前後には家具が置かれる傾向にあった。8㎡に満たない台所は、独立したうえに家具が置かれたため、食事をする広さを失った。一方で、2つの居室が連続的であったことが、北側居室の居間化、南側居室の個室化を可能にした。もし、そうだとすると、わずかな設計変更が、思いのほか住み方に影響を与えたことになる。

居住者層の違いが関係している可能性もある。高級住宅地に位置する白金町団地では、ダイニング・テーブルが普及し、ピアノやソファが狭い室内に持ち込まれていた。これらは家具であると同時に豊かさの表現物であり、空間を飾るものであった。それらを引き受けたのが台所と南側居室である。

一方、公営51Cでは、逆に北側居室がそのような場所になっている。動線としても、玄関からのアクセスが直接ここにつながる。それに対し、南側居室は奥まった内向きの空間となっている。このような「表・内」の2項対比は、住空間の重要な空間概念であり、協会51Cと公営51Cとではその配置が逆転している点が興味深い。また、そのことから、食と寝の機能分割とは異なる規範が、この小さな住宅での営みに作用してきたことが窺える。

7. まとめ

福岡県住宅協会は、標準設計にもとづく最新の鉄筋コンクリート造集合住宅を、福岡県内の主要都市に建設した。その際、地域計画的な発想は希薄で、もっぱら建物や住戸レベルの質の向上を目標としたと見られる。そんな中であって、51Cは際立って多く建設された住宅タイプであった。ただし、同時期に設立された他の住宅協会で必ずしも51Cが多く採用されていたわけではなく、このような51Cの採用は、福岡県住宅協会の独自の判断だった可能性がある。

福岡県住宅協会が供給した51Cは、本来の標準設計とはいくつかの点で違っていた。なかでも、2つの居室の間仕切りが壁から襖に変わっていること、標準設計では異形だった畳が正規のサイズになり、2つの押入れの仕切りや襖やガラス戸も3尺モジュールの位置に置かれていることが特徴的である。これらは、当時の住宅の一般常識に即した変更とみることができる。もうひとつの大きな変更点は、バルコニーが住戸の幅いっぱいにはけられたことである。それに伴い、バルコニーへの出入り口も、洗面洗濯場から台所および南側居室へと変更されている。

このような標準設計と協会51Cのズレを、地方の後進性とも見ることができなくはない。しかし、これらは明らかに意図的な設計変更であり、見逃しなどでは決してない。協会は、国の標準設計を鵜呑みにせず、独自の検討

を加えたのである。ちなみに、51Cは4年後に発足する公団の2DKに受け継がれ、日本の住宅のスタンダードになっていったとされる。そして、2つの居室の連続性やバルコニーの扱いは、この協会51Cの方が公団2DKにむしろ近い。福岡県住宅協会51Cは、51Cが一般解として社会に浸透していく際の、ひとつの過程を示すものかもしれない。

バルコニーの変更によって、外観も大きく変わった。連続するコンクリートの腰壁が水平ラインを強調し、シャープな外観を生み出している。さらに、今川橋団地の解体時の調査では、施工段階でも試行錯誤の跡が認められた。それは、それまでにない新しい住宅をつくることに熱意をもって取り組んだ証のように思われる。つまり、戦後間もないこの時期の公共住宅建設が、地方の現場で関わる人々の当事者意識のもとで行われたということであり、標準設計51Cはむしろそのことによってリアリティを獲得したといえる。

住まい方の調査では、標準設計からの変更が少なからず住み方に影響を与えたことが確認された。一方で、食寝分離と寝室分解については、状況に応じて様々に選択されており、必ずしも優先原則にはなっていなかった。実際の生活では、それとは別の規範がそれぞれの住まいで形成されていたように思われる。

なお、この研究は、実際に建てられ、住まわれた51Cの検証を目的としている。その意味で一定の成果をあげることができたと思うが、これをもって全国の状況を語れるわけではない。おそらく他にもさまざまな試みがあったはずであり、むしろ、その可能性を提示できたことが今回の成果と考える。

<謝辞>

調査に際し、福岡県住宅供給公社、北九州市建築都市局住宅部および対象団地の居住者の方々に多大な協力をいただいた。また、鈴木成文先生にはこれらの51Cを実際に見ていただき、開発に携わった立場から貴重な助言を賜った。記して謝意を表したい。

<注>

- 1) 文献4)～9)ほか。なお、これらの見解に対して、鈴木成文氏が「五一C白書」文献3)において、当時の社会背景をもとに開発期の実情を解説している。
- 2) 大杉町団地は、2006年に全面的に改修され、1LDKの新しい住戸に変わっている。その経緯や現在の住まい方についても調査を行なっているが、紙数の制約からその報告は割愛する。
- 3) 八幡駅前の平和ビル、本町アパート、白川町団地など。文献13)参照。

- 4) 大阪府住宅協会では、同時期の51Cの採用が24戸(1.6%)ときわめて限定的であり、この傾向は必ずしも全国の都道府県レベルの住宅協会に共通するわけではない。文献14)参照。
- 5) 実施案は、吉武研究室の案を引き継いだ久米設計によって書き上げられた。吉武研究室案と久米設計案とは、バルコニーの段差、便所の和洋、出窓の採用などの点に若干の違いが見られる。図7は久米設計による実施案で、各自治体が手にしたのはこちらの図面である。なお、51C開発の経緯は、文献3)に詳しく述べられているので参照されたい。
- 6) 吉武研究室案では、入込みバルコニーと外側のバルコニーが連続的に使われることが想定されていたため、床レベルが揃っていた。

<参考文献>

- 1) 鈴木成文：建築計画学6 集合住宅 住戸，丸善株式会社，1971.7
- 2) 鈴木成文：住まいの計画・住まいの文化，彰国社，1988.11
- 3) 鈴木成文：五一C白書，住まいの図書館出版局，2006.12
- 4) 藤森照信：昭和住宅物語，新建築社，1990.3
- 5) 山本理顕ほか：〈座談会〉nLDK以後，建築雑誌，1995年5月号，日本建築学会，1995.5
- 6) 上野千鶴子：家族を容れるハコ 家族を超えるハコ，平凡社，2002.11
- 7) 鈴木成文・上野千鶴子・山本理顕：「51C」家族を容れるハコの戦後と現在，平凡社，2004.10
- 8) 橋本直明：2DKがつくるnLDK，すまいるん，2008秋号，住宅総合研究財団，2008.10
- 9) 渡辺真理・木下庸子：身体に合わないnLDKという服を脱いで，建築ジャーナル，2006.1
- 10) 建設省住宅局：1945-1950住宅年鑑，彰国社，1951.9
- 11) 建設省住宅局住宅建設課：公営アパートの設計について，建築雑誌，日本建築学会，1952.1
- 12) 住宅金融普及協会：コンクリートアパート設計図集 第3輯，新建築社，1955.8
- 13) 菊地成朋・西村博之：都市デザインとしてのハウジングの可能性—八幡の戦災復興都市計画と公共住宅建設，住宅建築，No.339，pp.148-152，2003.6
- 14) 大阪府建築部住宅建設課：住宅年報57，大阪府，1957.12
- 15) 福岡県住宅復興促進協議会：福岡県住宅復興誌Ⅰ，福岡県住宅復興促進協議会，1959.10
- 16) 福岡県住宅復興促進協議会：福岡県住宅復興誌Ⅱ，福岡県住宅復興促進協議会，1964.1
- 17) 公営住宅20年史編纂委員会：公営住宅二十年史，日本住宅協会，1973.3
- 18) 北九州市史編纂委員会：北九州市史 近代・現代 産業・経済Ⅰ，北九州市，1983.2-1993.3
- 19) 門司市史編纂委員会：門司市史 一第二編一，門司市，1963
- 20) 大牟田市史編集委員会：大牟田市史，大牟田市，1974.11
- 21) 大牟田市教育委員会：大牟田市における三池炭鉱関連の住宅調査報告書，大牟田市，1999.3

<研究協力者>

福原信一	九州大学大学院人間環境学府	博士課程
冬野裕二	九州大学大学院人間環境学府	修士課程(当時)
小村悠介	九州大学大学院人間環境学府	修士課程
新崎朝規	九州大学大学院人間環境学府	修士課程
田中翔大	九州大学大学院人間環境学府	修士課程